2019 年度　第４回観察会　記録

日　時	2019 年 7 月 10 日(水)～12 日(金)
観察地	長野県木曽郡上松町
講　師	池田木材(株)社長 池田聡寿先生
テーマ	木曽の森と林業
備　考	参加者 16 名　(田中先生、スタッフ２名含む)　　記録；坪井都子

大阪からＪＲ中央西線南木曽駅までほぼ 2 時間半。駅で池田先生と合流し 3 日間お世話になった。

１日目（7 月 10 日）

１．妻籠宿

妻籠宿

島崎藤村が『夜明け前』で「木曽路はすべて山の中」と記しているように、中山道の木曽路といわれる地域は特に山深い場所に 11 の宿場がある。天保 14 (1843)年の「中山道宿村大概帳」によれば、妻籠宿の宿は本陣 1 軒、脇本陣 1 軒、旅籠 31 軒であり、宿内人口は 418 人であった。

1960 年代に長野県は深刻となった過疎問題の対策として、1968 年から 1970 年にかけて明治百年記念事業の一環として寺下地区の 26 戸を解体修復し、保存事業を制度面から後押しするために、独自の町並み保存条例である「妻籠宿保存条例」を制定した。経済成長に伴い全国の伝統的な町並みが姿を消していく中、いち早く地域を挙げて景観保全活動に取り組んだことが評価され、1976 年、国の「重要伝統的建造物群保存地区」の最初の選定地の一つに選ばれている。他の保存地区とは異なり、周辺の農地など宿場を支えた環境全体を保存するため、国有林を含めた広範囲が指定されている。電柱・電線は埋設され、日中は車両通行禁止とのこと。出梁造り（注 1)、堅繁格子（注 2)等が残る情緒ある家並みが続き、時が止まったように思える。これらの建物は〔売らず、貸さず、壊さず〕のため、所有者は代々家を受け継ぐ義務を負っている。ただし生活の便利な町に住み、夜間は無人とのこと。

（注 1）出梁造り（だしばりづくり）：建物の 2 階が街道側に張り出した構造

（注 2）堅繁格子（たてしげこうし）：縦桟が密度高く組み込まれ、すき間が少ない格子

（１）　妻籠脇本陣「奥谷」にて

妻籠脇本陣「奥谷(おくや)」は木曽五木の禁制が解かれた明治 10 年に総檜造りで建てられ、平成 13 年重要文化財に指定された。貴賓をお迎えするための優雅で贅沢な広い間取り、建物の北に造られた苔むす庭に花梨や多羅葉などが植えられている。

以下女性案内人のお話。

①　囲炉裏にまつわる話

長方形の囲炉裏の第一の席には当主が座る。特別に足のせ場も準備され、煙除けの衝立もある。一番下の席は嫁の席でござが剥がされ、直接板敷に座り皆の世話をする。

この伝統や仕来たりを見て子どもたちは育つので、学校で先生の言うことを聞きなさいという必要はないとのこと。

囲炉裏を囲んで話を聞く

② 明治天皇ご来館の話

明治 13 年明治天皇巡幸のおり、この脇本陣で休憩されることになり、急遽テーブルや浴槽、畳敷き厠と漆塗りの便器をしつらえたが、厠は残念ながら使われなかったとのこと。

③ おゆうさんの話

島崎藤村の初恋の女性おゆうさんは 14 歳の時、この脇本陣の林氏に輿入れしてきた。亡くなる前のおゆうさんにあてた藤村の手紙（額装）を案内人は朗々と謳い上げた。

（２）本陣

歴史資料館見学後の自由散策では「本陣」にも殆どの参加者が立ち寄った。本陣当主は代々島崎家が務めていたが、明治 20 年代に最後の当主広助（島崎藤村の実兄）が東京へ出て、建物も取り壊された。本陣跡地の町に払い下げを期に、平成 7 年に江戸時代後期の間取り図をもとに忠実に復元された。

２．民宿「さわぐち」にて

くねくね山道の間に埋まって佇んでいた。築 130 年、中に入ると歴史を語るような大きな梁や柱、囲炉裏が私たちを迎えてくれる。風呂は脱衣所と浴室が一体型で、冬の寒い木曽ならではの工夫が凝らされていた。お待ちかねのジビエ料理は屋外設置のバーベキュー所で。鹿や猪肉は木曽の深い味わいを教えてくれ、池田先生差し入れの地酒に旅の愉しみを堪能させて頂いた。

民宿「さわぐち」

ジビエ料理

２日目（７月 11 日）

１．上松町「赤沢自然林」

（１）天然更新実験林にて

ぽつぽつ小雨の中、午前中は「木曽森林管理署」の中島さんから「天然更新実験林」100 林班の案内と説明があった。

木曽ヒノキは古くから伝統的な建築物（神社、仏閣、城郭）などへ利用されるとともに地域の木材産業を支える重要な役割を果たしてきた。江戸時代の尾張藩のもと、ここ木曽では「木一本、首一つ」と言われる厳しい管理の中で、木々は守られてきた。

この「赤沢ヒノキ林施業試験地」の面積は 10.18ha（1983 年）、場所は木曽森林管理署小川入国有林 100 林班の〔は 1~は 3〕小班である。赤沢ヒノキ林の永続を図るため、後継ヒノキ稚樹の育成を図る天然更新をねらいとし、下層ヒバの処理・上層木の伐採・ヒノキ稚樹の保育等の施業方法を明らかにすることを目的に、1983 年から取り組んできている。

木曽谷は 100 林班のようにササが少ない地域ばかりでなく、湿性ポドゾル土壌（注 3）のせき悪（注 4）な、謂ゆるササ生い地も広く分布している。そのためササ生い地における天然更新技術の開発にも古くから取り組んでこられた。長年の三浦実験林や助六実験林等での試験研究の中で構築されたものが天然更新技術の礎を築いてきたと言える。そして現在、更に確実な更新技術を目指した新たな取り組みを進めているとのこと。

天然更新林 100 林班での説明

（注３）　湿性ポドゾル土壌：表層に鉄が抜けた白い層を持つ特徴のある土壌

（注４）　せき悪:土壌の成分に乏しく,樹木の成長が停止し,あるいは極めて不良な林地

（２）「赤沢施業実験林」の天然更新林の状況

① 稚樹バンク成立。更新成功の可能性は高いが、継続調査が必要。非常にムラがあり、特に斜面下部は更新が良好でない。

② 群状伐採林分と単木抜き伐り林の更新状況を比較すると、今のところ群状伐採の方が更新成績良好。

③ 高さ２ｍ以上の前生稚樹と２ｍ以下の後生稚樹、両方が更新に貢献している。伐採後、豊作のたびに後生稚樹が蓄積されていった。数で主体となるのは後生稚樹、しかし密度は低いが前生稚樹が旺盛な成長をして、更新林分の主体となっていくだろうとのこと。

池田先生の現地での木遣り唄

２．伊勢神宮ご神木跡地見学

昼食後、横井剛さん（NPO 法人「ひのきの森」元理事長）の案内で「昭和 60 年伊勢神宮御神木伐採跡地」を見学した。

直径 1m余の巨大な切り株が御神木（御樋代木＝みひしろぎ）（注 5)の切り株である。昭和 60 年 6 月 3 日、この場所で御杣始祭が古式ゆかしく執り行われ、斧だけを使い木を切り倒す「三つ紐伐り」により、内宮と外宮の「御樋代木」をタスキ掛け状に重なり合うように伐り倒した。池田先生は伐り倒すとは言わず「寝かせる」と表現される。寝かせる時、樹齢 300～350 歳の檜は最後に“ギィー”という声を挙げると語られた。小雨降る中、池田先生が唄う「木遣り唄」は森に響きわたり、圧巻であった。

（注５）　御樋代木：神社で、神体を納める木を尊んでいう語。特に、伊勢神宮のものをいう。

午後の後半は「健脚組」と「散策組」の２班に分かれてトレッキング。

３－(１)「健脚組」は男性７名、女性２名が池田先生の案内で冷沢コースへ。

丸山渡停車場横の線路を渡り、冷沢コースに入る。すぐに「熊」出没注意の看板あり。健脚コースと言ってもアップダウンはそれほどなく、道は整備されており歩き易かった。

① 根上がり木：最大のものは田中先生も楽々と下をくぐれるほど大きい。このような大きな根上がり木をあちこちで見かけた。

② 椹窪(さわらくぼ)天然林；比較的サワラが多くヒノキと半々分布しているので、椹窪と称する。

③ 大樹の森；かって神宮備林として管理していた時代、直径 60cm 以上の形質優良な木曽檜を「大樹」称し、台帳管理していた。木曽全体で 18,000 本、赤沢周辺では 2,690 本。

④ 冷沢床堰(とこぜき)；この地域最上流の堰跡

⑤ 冷沢峠は本日の行程で最も美しいと言われる森である。シロモジとマルバの下層木が雨に濡れて緑が大変美しかった。

冷沢峠のヒノキ林

３－(２)　散策組は女性７名が横井 剛さんの案内で

ヒノキの天然更新とオオヤマレンゲ鑑賞へ。

① ヒノキの天然更新

まさに天然更新そのもののヒノキに出会った。自然に朽ちた

直径 70cm ぐらいの母樹の上部から沢山の稚樹が育っていた。

ヒノキの母樹と稚樹

上部は苔むしたり、枯葉で埋まったりしている。ここでヒノキの種子が芽生えたのだ。自然の逞しい生命力を感ずる。

雨が少しきつくなり、川の傍の広めの東屋に入る。横井さんが各月を代表する木曽の森の花を撮影した写真集で説明されたが、美しい花を満載した写真集は本当に素晴らしかった。

② 横井 剛さんのこと

木曽の森を愛し、オオヤレンゲの復活をめざし、ただ一筋に 30 年余過ごしてきた横井さんは３年前にご伴侶を亡くされた。そのとき初めてご伴侶の存在の大きさに気が付き、喪失感で何の意欲もわかず、木曽の森からも遠ざかってしまっていたが、後輩の池田先生に引っ張り出され、今回案内をすることになったとのこと。この散策組は全員女性だったこともあり、横井さんに共感と励ましの想いを伝えることになった。横井さんの表情が少しずつ明るくなり、心なしかお元気になったように感じられた。

③ オオヤマレンゲ

森林交流センター傍のオオヤマレンゲが見事に花をつけていた。オオヤマレンゲは別名「天女花」とも言い“この花の咲く所には甘い香りに誘われて天女が舞い降りる”という話があるそうだ。横井さんが上松町のシンボルになるようにと慈しみ育てた、美しく可憐なオオヤマレンゲを最後までゆっくり鑑賞した。

天女花・オオヤマレンゲ

４．池田木材(株)工場の見学

広い工場内には木曽の厳しい大自然の中で育った天然の木曽ヒノキ、人工の木曽ヒノキ(人の手を加えて育成・管理)、サワラ、ネズコ、コウヤマキ、広葉樹がびっしり並べられていた。直径１m もあろうかと思われる巨木の縦（およそ 10m）切断の様子に圧倒される思いであった。

案内された最後の部屋には完成した総檜風呂など木工製品が展示され、檜の香りでいっぱいであった。

５．旅館「たかの湯」にて

たかの湯自慢の薬湯「百草の湯」は木曽五木（注６）の一つ、コウヤマキの浴槽。御嶽山で採取した薬草を主成分とした入浴剤を使用しているので、体をじっくり芯から温めて旅の疲れを癒してくれる。みな思い思いに入湯し、ほっこり、ゆったりとしたよい気分になった。夕食に池田先生から差し入れのお酒をいただき、にぎやかな懇親会になった。

池田先生がシニア自然大学校「自然学講座」を祝した即興の「木遣り唄」を披露され、みなで大喝采。その上「大先輩の横井さんが自然学の皆さまのお蔭で３年ぶりに復活してくれた。」とまで語られ、私たちも私たちも喜びを共有することとなった。

（注 6） 木曽五木：ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコ、コウヤマキ。

３日目（７月 12 日）

薄曇り空だが、雨でなくて嬉しい。とは言え、開田高原から木曽御嶽山は見えないらしい。そこで池田先生の提案で、「御嶽山」観光を「奈良井宿」散策に切り替えることになった。

１．奈良井宿

旧中山道の奈良井宿は鳥居峠上り口にある鎧神社から奈良井川沿いに緩やかに下りつつ、約１km にわたって街並みが並ぶ日本最長の宿場である。昭和 43 年から官民学連携による街並み保存運動が始まり、昭和 53 年には国から「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。

街並みには昔ながらの水場が点々とあり、タイムスリップするような光景であった。この宿は今も人が居住し生活している。奈良井宿は代々池田家の本拠地であり、先生が生まれ育った所なので、腕白時代から現在までのことを土地の人々にはよく知られているとのこと。

奈良井宿

水場

奈

２．開田高原・木曽馬牧場

標高 1100m~1500ｍに広がる開田高原は真夏でも平均気温 18 度という爽やかさで、西方に木曽御嶽山を臨む。開田高原は日本では数少ない在来馬「木曽馬」と「蕎麦」のふるさとである。木曽馬は元々、蒙古の大陸系の馬で、一説では紀元前１世紀の漢で改良された「蒙古草原馬」が２～３世紀に、朝鮮半島経由で渡来したという。平安時代から江戸時代にかけては武士の馬として使用された。木曽馬は一時絶滅寸前だったが、木曽馬保存会が中心になって保護活動を進めた結果、飼育数は増加し、現在は 200 頭弱まで回復した。以前のような乗用・農耕を目的とした需要はないとのことだが、ずんぐりして愛嬌ある木曽馬と写真も撮れて、いい記念になった。

アイスクリーム工場の傍で一瞬、御嶽山が顔を出してくれた。私たちにお別れの挨拶をしてくれたようだった。

木曽馬といっしょに

<u>さいごに</u>

「木曽」は池田先生を始め、横井さんや地元の方々が自然と伝統と歴史を愛され、発展を願って活躍される郷土愛に満ち満ちた人々の地でした。私たちも自分の地元の伝統と歴史を学び、新たな発展のために頑張らなければと思いました。

公私ともにご多用の中にも関わらず、宿泊も含め全３日間、私たちを案内して下さった池田聡寿先生に心から感謝の意を捧げます。誠に有難うございました。

民宿「さわぐち」の前で

木曽ヒノキの自然と文化の観察会にご参加いただいた皆様 20190713

皆様それぞれに、三日間の木曽ヒノキ自然と文化の観察会を思い出しながら、週末をお過ごしのことと思います。お疲れ様でした。岩佐さん、坪井さん、本当にお世話様でした。

一番心配された天候も、梅雨最盛期としてはよい条件に恵まれ、とても心身に染み渡る自然学講座ならではの観察会となりました。当初の予想からは人数的には小規模になりましたが、スタッフの岩佐さんや坪井さんのご苦労やご心配を別にすれば、この人数の観察会が適正な規模でもあるように感じました。月に２回の此花会館での講座では得られない受講生相互の交流という、観察会の目的も十分に達成されたと感じました。

三日間にわたりご案内いただきました池田聡寿さん、会社の経営、お母さんのお世話、地域の世話役、対外的なご活動などが重なり、この上なくご多忙のご様子でしたが、二晩とも私たちと同宿いただき、本当にありがたく、中仙道の歴史の香り、四百年にわたり天然更新されている木曽ヒノキの森のたたずまい、それらを賢く熱い思いで継承されている「池田聡寿さんとと周りの人々に学ぶ観察会」としても、本当に貴重なものとなりました。そうしたものを引き出した地球環境自然学講座の皆さんの潜在力を改めて実感しました。

それらが凝縮された形で現れたのが、オオヤマレンゲとヒノキの森に生涯をかけてこられた横井剛さんを見事に“復活”させた女性陣の活躍でした。７月 11 日は横井さんのこれからの生涯の新たな出発の一日になるのかもしれません。そうなって欲しいと願わずにはおれません。折にふれ、池田さんに横井さんのご様子などをお聞きしながら、アフターケアーの道など考える機会が来るかもしれません。

個人的には、赤沢自然休養林百林班の四百年にわたるヒノキの天然更新の森の様子が特に印象に残りました。林道をはさんでヒノキの 300 年生の母樹とシロモジやオオバノキの間に続く世代を担う若いヒノキが点在する明るい森と、その下のアスナロ（ヒバ）が茂って下草や潅木がほとんど生えていない放置林との対称に、森と人の営みの長い時間を通じた深い付き合いを実感しました。森の心身に及ぼす効果としてのハイパーソニック・エフェクト（ストレス状態の低減、免疫機能の亢進、心の豊さの向上など）は、林道の（上）と右（下）では、圧倒的な違いが有るに違いないと実感しました。

今回の木曽ヒノキの観察会のハイライトは、切り株とその上に命をつないだ根上がり木をあちこちにみることができた点でした。命の継承とその悠久の時を感じました。切り株の役割は、まさに私たちシニア層のあるべき姿そのものでもあり、そのように振舞えればとの思いと、まだまだそれには程遠いとの思いが交錯しました。

ただいま、木曽福島近くを、昨日とは逆に長野に向かっています。夕方 5 時ごろに野尻湖に二人乗りシーカヤックが二艇移送されることになり、その受け取りです。カヤックで野尻湖畔を皆さんにも折に触れて楽しんでいただける条件整えています。

2019 年 7 月 13 日　田中　克